

幼大連携による4歳児を対象とした リトミック活動に関する実践報告

—稲置学園創立90周年記念事業“夢のステージ”に向けた取り組み—

A Report on the Rhythmic Activities in the Kindergarten and University Cooperation
—Activities for a Parents' Day in the 90th Anniversary Project—

連 桃季恵 (人間科学部こども学科講師)

Tokie MURAJI (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Lecturer)

〈要旨〉

金沢星稜大学附属星稜泉野幼稚園では、これまで3歳児を対象としたリトミック活動を実施してきており、2022年度は3歳児に加えて4歳児を対象としたリトミック活動も実施することとなった。どちらのクラスにおいても筆者が講師を担当している。加えて、2022年には稲置学園創立90周年記念事業が各設置校で計画され、星稜泉野幼稚園では園児と高校生・大学生・大学教員・地域で活躍しているアーティストが共演する“夢のステージ”が開催された。4歳児クラスにおいては幼稚園（園児・保育者）と大学（学生・教員）が連携して、普段実施しているリトミック活動を保護者に披露する形態で行うことになった。本報告は、“夢のステージ”での発表に至るまでの、活動内容や子どもの様子をまとめた実践報告である。

〈キーワード〉

幼大連携, リトミック, 発表会

1 はじめに

本学は、幼大連携会議を設置するなど、本学附属幼稚園と大学の連携を図っている。その中で、本学の教員である筆者は、これまでに本学附属星稜泉野幼稚園（以下、星稜泉野幼稚園）において3歳児を対象とするリトミック活動の講師を担当してきた。その際、筆者のゼミに所属している3年生や4年生がリトミック活動に参加し、子どもがどのように音楽を捉えて動くのかなど、体験を通して学びを深めている。

2022年度においては、4歳児を対象としたリトミック活動が加わった。また稲置学園創立90周年記念事業が各設置校で計画され、星稜泉野幼稚園では、園児と高校生・大学生・大学教員・地域で活躍しているアーティストが共演する“夢のステージ”を開催することとなった。4歳児クラスのステージにはリトミックが選ばれ、その背景には、『子どもたちの生き生きと表現している姿を保護者の方や外部の方に見ていただきたい。また、年少児からリトミックを取り入れているが、リトミックを通して成長している姿を知っていただきたい。』といった園の思いがあった。

保育園・幼稚園等においては、子どもたちが保護者に向けて歌や踊り、劇などを披露する発表会等が実施されることがある。発表の場は、日常の活動の盛り上がりとしてあることが望ましいとされ⁽¹⁾、また子どものありのままの姿を見せることをねらいとした場もある⁽²⁾。しかしながら、「見せる」ための練習に時間を費やし、音楽的な表現を楽しめていないことが指摘されるなど⁽³⁾、課題も見受けられる。そのため“夢のステージ”では、見せるために練習を重ねるのではなく、普段のリトミック活動を楽しみ、子どものありのままの表現がみられる発表を目指した。

当初考えていた“夢のステージ”での主な発表内容は、①基礎リズムのステップ（四分音符・二分音符・八分音符）と、②ゴセック作曲《ガヴォット》を用いた動きでの表現と楽器演奏といった大まかなものであった。なぜゴセック作曲《ガヴォット》を用いることにしたのかについては、曲調が軽やかで明るい雰囲気であること、三部形式で構成されるなどメロディーが繰り返されること、そしてリズムフレーズ（リズムパターン）がおおよそ ♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪であることから、音楽を捉えやすいと考えられたためであ

る。2つの発表内容は、様々な方法で実践を重ね、保育者と打ち合わせをしながら、子どもたちから発せられた声や動きなどを基にステージを作り上げることとした。発表までに実施したリトミック活動の主な内容を表1に示す。

本報告は、子どもたちが音楽をどのように感じて動き、どのように本番に至ったのかに関する実践報告である。本報告にあたり、活動中のビデオ撮影及び紀要掲載について、保護者には書面にて、学生には口頭にて承諾を得ており、本報告の内容については園長及び担当保育者に確認いただいた。

表1 発表までに実施した各日の主な活動内容

日	リトミック内容	記載箇所
5/6	生き物の特徴的な動きを模倣することで基礎リズム（♪, ♩, ♪）を体験する	2-1
	ゴセック作曲《ガヴォット》を聴き、感想を共有する	2-3
6/10	5種類の音楽を聴き、どのように聞こえたのかについて感想を共有する ①ブルグミュラー作曲「大雷雨」 ②マクダウェル作曲「野ばらに寄せて」 ③ネッケ作曲「クシコスポスト」 ④グリーグ作曲「山の魔王の宮殿にて」 ⑤ゴセック作曲《ガヴォット》	2-3
7/1	歌「ひらいてとじて」を用いリズムパターン【♪♪♪♪】を体験する	2-2
7/15	トライアングルを用いて伸びている音や伸びていない音を聞き、それらを身体表現したり、紙テープで表現したりするを通して基礎リズムを体験する	2-1
9/9 合同	高い音と低い音を聴き分けて手をたたいたりジャンプしたりし、その後、楽器を鳴らすことで、リズムパターン【♪♪♪♪】を体験する	2-2
	物語を用いて基礎リズムを体験する	2-1
9/13 合同	《ガヴォット》で用いられているリズムパターン【♪♪♪♪】に気づき、動き（ケンケンパーなど）や楽器で表現する	2-2
9/20 9/27 合同	《ガヴォット》で用いられているリズムフレーズ【♪♪♪♪♪♪♪♪】の動きを完成させ、本番の流れをつかむ	2-4
9/30 合同	金沢星稜大学講堂にて、学生のマリンバ演奏も交え、リハーサルを行う	2-4

2 本番までの活動内容と子どもの様子

2-1 基礎リズムの体験

基礎リズムについて、本実践では、四分音符、二分音符、八分音符を取り上げた。3歳児クラスの際、生き物や乗り物などの特徴を動くことで、音符の音価に対する時

間・空間・エネルギーを感覚的に捉えてきた。そのため、4歳児クラスに進級した際、このような活動で培った感覚を生かして、単純に音符の音価をステップする（普通に歩く、ゆっくり歩く、走る）ことを目指した。しかしながら、活動をする中で、生き物の特徴を模倣した動きを好む傾向が感じられた。以下に、音符の音価に応じた音楽を提示した際、子どもが想像した生き物とその動きを表2に記す。

表2 各音符を表した音楽に対するイメージと動き

音符	生き物	動き
♪ スタッカート	「カエル」 「ウサギ」	かがんで手を床につけてから跳ぶ/立って頭に手を当てて跳び続ける
♩ 低音	「ゴリラ」 「ゾウ」「クマ」 「ライオン」など	前方に手を力強く構えながら大股で歩く/ゴリラを思い浮かべせるように胸をたたく/四足歩行で動く
♪ 高音	「ネズミ」 「ハムスター」など	手を頭に当てて腰をかがめて小さく走る/「チューチュー」と言いながら走る

表2のように、音楽を聴いて想像する生き物も動きも一つではなかった。この様子について担当保育者は、『ピアノの曲調からそれぞれ子どものイメージが違い、それぞれの表現方法が個性的であったのがおもしろかった』と述べている。基礎リズムの指導といった面では、指導者から動きを提示した方が、音楽のリズムやニュアンスに応じた動きになりやすい。しかしながら子どもの様子を見てみると、ある生き物にこだわりを持って身体表現する子どもの姿も見られ、その姿を認めていくことが、各音符の音価を感覚的に捉え、音のニュアンスに応じた身体表現をするといったねらいの達成につながると考えられた。そのため、生き物は特定しないものの、ピアノの音や自分の足音をよく聴くことを促し、またそのように聴いて動きたくなるような即興演奏の工夫を心掛けた。

基礎リズムの体験は、生き物の特徴的な動きの模倣だけでなく、トライアングルを用いて伸びている音・伸びていない音を身体表現する活動や、物語仕立てで動く活動（「気持ちよく散歩に出掛けるよ/雨が降ってきたから駆け足で帰るよ/水たまりがあるから水がはねないようにゆっくり歩くよ」など）により、反復的・感覚的に音符の音価を捉えられるようにした。以下、トライアングルを用いた際の子どもの様子を示す（事例1、事例2、事例3）。

事例1 トライアングルってどんな音? (7月15日)

指(指導者の略): トライアングルを持ってくる
 子(子どもの略): 「何やそれ?」(中略)
 指: ケースからトライアングルを取り出す
 子: 「あっ!」「あっ!」「あっ聞いたことある」「あるー」「とんとんとんや」
 指: 「これきいたことある?」
 子: 「あるー」「あるー」
 指: 「どんな音する?」
 子: 「きーん」(中略)
 指: 音を優しく(小さく)1回鳴らす
 子: 「ちーん」「ちーん」
 指: 子ども一人ひとりに近い場所で音を優しく鳴らす
 子: 「やりたい」「やりたーい」
 その後、園にトライアングルがあるかなど保育者に確認していると、①さきほどまで走りまわっていた子どもが指導者に近づき、指導者の肩に手を置く。その子どもの近くで、指導者は小さな音を鳴らす。すると、そのまま伸びている音を聴き、音が聞こえなくなるくらいの時に、指導者から離れてマットの上に駆けていく。

事例2 音の特徴に応じた動きの創作 (7月15日)

トライアングルで伸びる音を鳴らしたり、ミュートにしてスタッカートのような音を鳴らしたりし、子どもたちと伸びている音、伸びていない音に関してやり取りする。
 指: 再度小さい音を鳴らす
 子: ②声も出さずに音を聴く。走っていた子どもも立ち止まり音を聴く
 指: 「伸びている音の時、どうやって動こうかな。」
 子: ③「ピヨヨーン」と言いながら手を伸ばす子がいる
 指: 「あっ、それいい、それいい」
 子: ④他の子どもも「ピヨヨーン」と言いながら腕を左右に動かす
 指: 「伸びている音の時は、ピヨヨーンピヨヨーンってあっちいたりこっちいたりーと腕を動かそうか」と言い、二分音符を意識して音を鳴らす
 子: 腕や首を伸ばすように動かす
 指: 音をミュートにして四分音符を意識した音を鳴らす
 子: ⑤一斉に音に合わせて肩や首などを上下に動かします

下線部①②より、音への興味関心から部分的に活動に参加していた子どもがいることが分かる。一斉的な活動ではあるが、様々な活動内容を取り入れることで、“聴きたいな”“近づいてみようかな”といった子どもの興味関心が引き出される場となっていたのではないだろうか。また下線部③④⑤のように、子どもが音のニュアンスやリズムを感じてオノマトペや動きで表現したり、スタッカートの特徴的な音によって即座に子どもの動きが引き出されたりしていた。

事例3 C児とD保育者の動きによるやり取り (7月15日)

伸びる音(二分音符)に合わせて、やじろべいのように両手や両足を広げて左右交互に片足立ちする際、C児とD保育者は向かい合って手をつなぎ、左右に揺れる。次に伸びない音(四分音符)の動きを考えていると、C児は保育者に抱きつき、D保育者はC児を抱えたまま座り、指導者の口三味線に合わせて膝を動かす。指導者が「伸びるー伸びるー」と唱えると、D保育者は左右に大きく揺れ、C児は左右に傾いた姿勢になる。その後、ピアノで伸びる音や伸びない音が提示されると、二人は座ったまま向かい合って手をつなぎ、横に揺れたり、手を上下させたり、C児が床に寝転がると、それに合わせて動きを変化させる。

事例3のように、D保育者は子どもの様子に合わせて音楽を楽しめるようにしたいと思っていたのではないかと考えられる。C児は保育者とのやり取りを楽しみながら、音楽にあった動きが提供されることで、安心感を得ながらその場の雰囲気味わっていたのではないだろうか。この日は、学生が5人参加していたため、子どもの安全を確保できるだけの大人がいたことがこのような2人のやり取りを可能にしたともいえる。

事例1, 2, 3において、子ども一人ひとりが音楽を純粹に聴き、それに応じた表現をしており、子ども自ら音符の音価を感覚的に体験していたと考えられる。

2-2 ゴセック作曲《ガヴォット》で用いられている特徴的なリズムパターン【♪♪♪♪】の体験

発表で用いる音楽は《ガヴォット》であったが、様々な音楽に出会い、子どもたちの意欲や集中力が持続するように、様々な音楽や方法を用いて【♪♪♪♪】の活動を実施した。まずは歌「ひらいてとじて」(open-closeの替え歌)を用いた。その際、歌詞の「みんなで トントントン(♪♪♪♪)」に合わせて手をたたき、その後、片足跳びをしたり、前に歩いたり、後ろに歩いたり、右足と左足を跳びながら入れ替えたり、手首を左右にくねらせるように動かしたりと、子どもからのアイデアを基に様々な動きで体験した。また、別日には、指導者のピアノを聴き分けて、高い音は手をたたき、低い音はジャンプやケンケンパーをしたり、さらには楽器を鳴らしたりした(事例4)。その後、ガヴォットにおけるリズムパターンの体験を行った(事例5)。

事例4 動きでの体験から楽器での体験へ (9月9日)

指: カスタネットを取り出す
 子: 「カスタネットー!」「カスタネットー!」
 「カスタネットでパチパチするの?」
 指: 「どんな音するのかな?」

子：片方の手の平を上にしてもう片方の手で叩く
 指：「素敵ね。さっきみたいに、ケンケンパーって音を鳴らしたいの。」
 子：1人がケンケンパーのリズムを手でたたき、その後唱え出すと、他の子どもたちも手をたたき出す
 指：「あっ、それでやってみる。」と言い、ケンケンパーと唱えながらカスタネットを鳴らす。
 次にたまごマラカスを取り出し、ケンケンパーと鳴らしたいことを伝えると、子どもたちはたまごマラカスを持っているかのように手を上下に振りながら「ケンケンパー」と唱える。それに応じて指導者がたまごマラカスで音を出すと、子どもたちは合わせて「ケンケンパー」と唱える。その後、別の楽器も登場させ、楽器を交代させながら全員で全楽器を ♪♪♪♪ に合わせて鳴らす。

事例4の姿から、♪♪♪♪を動いた経験とこれまでに楽器を鳴らした経験が重なり、子ども自らが想像したり考えたりしながら、方法を導き出していることがうかがえる。

事例5 ♪♪♪♪はどこに隠れているかな？（9月13日）

指導者は「みんなが知ってる曲なんだけど、音楽聞いてね。どこかにね、トントンパー（手をたたきながら）みたいな、ケンケンパー（足でケンケンパーしながら）みたいな音が隠れているから。かくれんぼしているところ教えてね」と伝える。その後、《ガヴォット》出だしの4フレーズを弾くと、メロディーの全てを手でたたき子どもや、ケンケンパーの箇所のみを手で叩く子どもがいる。4フレーズ目を弾くと、ある子どもが立ち上がり ♪♪♪♪の箇所を足でケンケンパーをする。

事例5から、様々な動きを用いて反復的にリズムパターンを体験したことにより、ガヴォットのリズムフレーズに気づいている子どもがいたことが分かる。

2-3 ゴセック作曲《ガヴォット》に対する子どもたちの印象を反映させた衣装づくりの取り組み

夢のステージにおける衣装づくりの話が持ち上がり、リトミックにおける発表においてよく用いられているシンプルな服装＝柄のないTシャツに黒のズボンを提案した。加えて、このシンプルな服装に子どもたちのイメージや思いなどが込められると良いのではないかと考え、発表における最終演目としていた《ガヴォット》の印象を子どもたちから聞き、衣装づくりや動きの創作に生かすこととした。その際の子どもの様子について、事例6と表3に示す。

事例6 《ガヴォット》ってどんな音楽？（5月6日）

指導者は《ガヴォット》をピアノで演奏する前に、子どもたちに、「どんな感じがしたか教えてね。おもしろい音があったら教えて。」と伝える。Aクラスでは、演奏が終わると、「ネズミ、ネズミ、ネズミ」、「ブタ」、「虫」、「ちょっとおもしろかった」などといった声が聞かれる。またBクラスでは「この歌がいい」、「これがいい」、「メダカがいい」、「メダカはかわいい音楽がいい」、「私は女の子メダカがいい」といった声が聞かれる。

事例6は、初めて《ガヴォット》を聴いた際の様子である。子どもたちは音楽と生き物を結びつけようとしていることが分かる。事例6の前には生き物の動きを模倣する活動をしており、その際にBクラスでは、突如「メダカ」が話題に上がり、その身体表現も行っていた。この活動が《ガヴォット》の印象を捉えるのに影響していると考えられた。そのため、別日において、5種類の音楽を比較しながら聞くことにより、生き物にこだわらず音楽へのイメージを持つ機会を設けた。その際に用いた音楽や子どもの様子について、クラスごとに表3にまとめる。各音楽を聴き終わると、「どんな天気かな?」、「何色?」、「どんな人が歩いている?」などといった問いかけをしながら音楽に対するイメージを膨らませた。

表3 各音楽を聴いた際の子どものイメージや動きに関する具体例（6月10日）

曲名	Aクラス	Bクラス
大雷雨	「雷」「嵐」「黒、ブラック」	「知らん曲やった」「嵐」「雷」「黄色」
野ばらに寄せて	「晴れ」「青、だって青はきれいだからね、やっぱ白」「赤」	「雪、白い雪、ふわーと降ってる」
クシコスポスト	「茶色」「黄色」「灰色」「ピンク」	「雨やね」「雨、雨、雨」「曇りだった」「晴れてる、水色」
山の魔王の宮殿にて	「足をどンドンした音」「みんなが足のドンドンしとる」「くもり」「雨」	音楽を聴くと笑ったり足を動かしたりする 「うーん、人間」「ちがーう、だってドシンドシンだよ」「ウルトラマン」「恐竜」
ガヴォット	⑥「手をトントンしとる音」「晴れ」「ピンク」「グリーン」「オレンジ」「黄色」「白」「黒」「電車」「お花」「葉っぱ」	⑦音楽を聴くと手をたたき始める 「お散歩の晴れ」「青」「緑」「オレンジ」「黄色」「赤」「青」「水色混ざったやつ」「茶色」「（指導者がテンポを速めて弾くと）雨」

事例6や表3から、子どもたちは《ガヴォット》に対して前向きな感想を持っていると考えられた。また表2のように、各曲の特徴から天気や色、そして登場人物に想像を膨らませ、それらは関連し合っている部分があることがうかがえる。しかしながら、ガヴォットに関しては、他の曲よりも色の種類が多く挙げられ、《ガヴォット》に対する前向きな感想を踏まえ、子どもそれぞれの好きな色と結びついているようにも感じられた。そのため、衣装に関しては、特定の色に限定するのではなく、様々な色が混在するような衣装を園長に提案した。その後、園長よりTシャツは手作りすることになったとお聞きした。保育時間において、子ども一人ひとりが色を選び、模様になるように思い思いにゴムで縛り、子どもの手でTシャツを染めたようだ。このような衣装づくりになった経緯について、園長は『当園は「遊びから学びへ」を目標としているため、活動の中には必ず子ども主体の作品を取り入れるようにしている。染物は初めての経験だったが、色の変化を知ることができ、当日は自分たちで染めたTシャツを着たので、いつも以上に生き生きと表現していたと思っている。』と教えてくださった。



写真1 Tシャツに好きな色や模様を染めている場面

2-4 発表内容の決定とリハーサルの様子

9月になり2クラス合同でのリトミックが実施され、活動内容を決定させていった。これまでの子どもの様子を踏まえ(2-1)、当初予定していた①基礎リズムのステップに関しては、単純にステップするのではなく、生き物の特徴を動きで模倣する形で実施することとした。四分音符はウサギ、二分音符はゴリラ・クマなど、八分音符はネズミやハムスターなど、子どもの発言からこのような生き物の模倣をしていると考えられた。さらに、基礎リズムとは言えないが、即時反応としてカエルも登場させることとした。9月の合同リトミックの際、基礎リズムのステップをしていると、「カエルしたーい」といった声が聞かれ、その日の最後にも別の子どもから「カエルー」と発せられ、全員で音楽の合図で飛びだす活動を行った。随所にこのようなリクエストがあり、即時反応の活動としてカエルを挿入することとした(写真2)。



写真2 カエルさんいつでくるかな!?

②ゴセック作曲《ガヴォット》を用いた動きでの表現と楽器演奏に関しては、まず ♪♪♪♩ を車のクラクションに見立てて提示し、次に高い音と低い音を聴き分けて手をたたいたりケンケンパーをしたりし、さらにそれらを踏まえて《ガヴォット》につなげる流れとした。発表時間の関係上、車を運転しながら聴こえたクラクションのリズムを手でたたく表現活動を省略しようかと考えたが、担当保育者から『車の運転で右に曲がったり、左に曲がったりをする際、隣にいた子どもの体に自分の体を寄せると、次に曲がる時は私の方に体を寄せてくる姿がみられ、活動を楽しんでいた』ことをうかがった。そのため、この活動は残しつつ、他の活動の時間配分を見直した。またガヴォットは、リズムフレーズに合わせた動きによる表現と、それを踏まえた楽器演奏を行うこととした。動きによる表現については、前半部分(♪♪♪♪♪♪)は表3の下線部⑥⑦を踏まえ手を動かしながらたたくこととし、後半部分(♪♪♪♩)にはケンケンパーを採用した。ケンケンパーに関しては、楽譜に示されたスタッカート・スタッカート・テヌートに合った動きであると考えられたことと、子どもたちが自分の体を調整しながらケンケンパーを習得しようとしている姿がみられたからである。担当保育者からも、『ガヴォットの曲を部屋で弾くと、ハミングで歌ったり、「ケンケンパー」と音楽に合わせて言ったりしていた』とお聞きした。楽器演奏については、ケンケンパーの部分でデスクベル(和音)を鳴らすことを行った。その際、演奏会の雰囲気子どもたちが感じられるように、学生と相談してマリンバを演奏することとした(写真3)。子どもたちがマリンバの音を聴いたのは、本番前日のリハーサルの時であった。その時の様子を学生は、『リハーサルで初めてガヴォットの演奏にマリンバが加わると「可愛い音になった」と眩く子どもの様子が見られ、(中略)それだけ音をよく聴き、音楽を耳で感じているのだと思った。』や、『マリンバが入ることで音を合わせる楽しさがより一層感じられた。』と述べ、音楽を楽しむ学生の試みが、子どもたちの新たな刺激になっていたようだ。

発表内容については、保護者にどのような音楽要素を動

きなどで表現しているのかをお伝えしたく、プログラムを作成して配布した。以下は、そのプログラムを基に、発表内容が分かるように一部を修正したものである。

〈発表内容とねらい〉

1. 「入場」
ビート（拍）にのって入場します！
会場から手拍子が聴こえると嬉しいです！
2. 「おへんじはあい（ソルフェージュ）」
どんな高さで、どんな強さで、どんな音の並びでお返事するといひかな？
3. 「音符の音価などに応じた動きの体験（基礎リズム）」
四分音符（中音域）………歩く
四分音符（スタッカート）…ウサギ
二分音符（低音域）………ゴリラ・クマなど
八分音符（高音域）………リス・ネズミなど
即時反応………カエル（リクエスト多数）
4. 「リズムパターンの体験（高低の聴き分け）」
クラクションのリズムはどんなリズム？
手で叩くの？それともケンケンパー？
5. 「リズムフレーズとニュアンスの体験」
～ゴセック作曲《ガヴオット》～
まずは動きで！次は大好きな楽器で！
どんな演奏会になるかな？
小さな演奏家たちに大きな拍手をお願いいたします！
6. 「退場」
7. 「親子リトミック」



写真3 リハーサル時に披露した学生によるマリimba演奏

3 本番“夢のステージ”における子どもの様子

3-1 担当保育者と学生の感想より

“夢のステージ”においては、進行やピアノ演奏を筆者、舞台上での子どもへの援助や合奏時の指揮を担当保育者、子どもの安全確保とマリimba演奏を学生が務めた。子どもたちがどのような様子であったのかについて（写真4、写真5）、舞台上で子どもの様子を見ていた担当保育者と学生からの感想を以下に示す。

〈担当保育者より〉大きな舞台だったが、緊張している子が少なく、普段プレイルームで行っているリトミックと同じような雰囲気だったと感じた。／車の運転する表現の動

きが気に入っているようで、特にカーブのところでは友達とぶつかることを楽しんだり友達と顔を見合わせて笑っている場面があった。／自分の家族が見に来てくれたことが嬉しく、普段以上に張り切っていたと思う。／舞台が広いので、のびのびと動くことができた。子どもたちは自由に動いていたが、ぶつかりそうになることはほとんどなく、子ども自身が考えながら動いていたのも印象的である。／発表会後に「どうだった？」と聞くと、「楽しかった～!!」と声を揃えて話していた。／舞台の上でも終わった後も子どもたちが笑顔であったのがとても印象深く、またやり遂げた達成感に満ちた表情だったように感じた。

〈学生より〉思っていたより子どもたちに緊張する様子がなく、普段のリトミックの時のように、楽しんで体を動かしたり演奏したりしていた。また、ピアノや私たちのマリimbaに合わせて、子どもたちがデスクベルを演奏したことで、より音楽を身近に感じる事ができたのではないかと考えた。子どもが「マリimbaの音が好き」と言ってくれたり、演奏に合わせて保護者と一緒に楽しんで体を動かしたりする様子を見て、子どもたちと一緒に音楽を楽しむことができてよかったと思った。／デスクベルを指揮と音楽に合わせて楽しく演奏する様子が見られた。私自身もマリimbaを演奏しながら子どもたちとひとつの音楽を一緒に楽しむことができて嬉しかった。／ステージ上で活動している子どもと、舞台前に遊んでいる子どもの違った様子を見ることができた。舞台の裏で緊張していて静かだった子どもも、本番になると楽しそうにリトミックをしていた。この様子が印象的であった。／無理矢理やっている感じではなく、今までの活動の延長のような感じの発表だったので子ども達の自然体な様子を見ることができた。／子どもたちはよく音を聞いて、合図をみて、音を奏でていて、ベルを鳴らすだけだけど、たくさんの感覚を使って音楽をしているのだと思った。

3-2 保護者あてのお便りより

指導者である筆者は、本番後、子どもたちと一緒にステージに立っていたからこそ感じたこと、感動したことを保護者にお伝えしたく、お便りを作成した。以下は、お便りの一部を修正したものである。

（中略）今回の発表は、園にとっても、私にとっても、挑戦だったと思います。なぜなら、リトミックという音楽教育法は、「聴く・聴き分ける」「判断する」「表現する」といったことを、指導者の即興演奏によって行うといった特性があり、子どもたちは完全に決められた演目をするわけではなかったからです。また、普段の場所ではなく、大きなホールでどのように子どもたちが自分を表現するのか、未知な部分が多くありました。

本番を迎え、子どもたちを見ていると、純粋に音楽と向き合い、友達と向き合い、会場の方々と向き合いながら楽しんでいる様子が見られ、リハーサル以上に私もいろいろ

と挑戦したくなってしまいました。私が歌声のニュアンスを変えると、それに気づき子どもたちの歌声も変わりました。また音楽のGo-Stopも瞬時に聴き分けるなど、驚くほどの集中力が感じられました。同時に、動きの躍動感がこれまで以上にあったように思います。この本番によって、子どもたち一人ひとりの力がググッと引き出されたのではないのでしょうか。また“大きなステージでの本番”という場ではありましたが、いつも通りに私に話しかけたり、駆け寄り、体を自然に動かしたりと、笑顔でその場を楽しんでいる子どもたちがとても頼もしく、嬉しい気持ちになりました。(中略)

筆者自身は発表前に緊張をしていないとは言えない状態であった。しかしながら、発表が始まると、子どもたちの笑顔や筆者を見る目、そして音楽を聴こうとする集中力を感じ、次第に緊張がほどけていった。担当保育者や学生も感想で述べているが、大きな舞台ではあったものの、子どもたちは、個人差はあるだろうが、この時間・空間に集中し、全身で楽しんでいたと思われる。そして、これらは本番ならではの体験だったのではないだろうか。



写真4 “夢のステージ”において子どもたちが動いている場面

4 本番後における子ども様子と学生の取り組み

本番後、筆者が星稜泉野幼稚園を訪れると、4歳クラスの子どもが筆者に近寄り、手を回しながらクラップした後、ケンケンパーを行った。この動きは、ガヴォットで用いた動きであり、筆者を見つけてそれを提示したということは、この活動がその子にとっては前向きな活動として心に残ったのではないかと考えられた。また、保護者の方から、自宅で姉妹と一緒にガヴォットで遊んでいることをお聞きした。ガヴォットの他にも、毎回のリトミック活動の導入で実施し、夢のステージでも取り上げた「おへんじはあい」(指導者の歌による「○○さん」の呼びかけに対して、その音程で「はーあーいー」と答える)に関して、担当保育者より『「○○ちゃん」と音程をつけて言うところが気に入っていて、リトミックが終わった後、部屋でも子ども同士でやり取りする場面があった。』とうかがった。こ

のように、本実践における活動が、活動後や本番後においても子どもの遊びや楽しさにつながっていた。

また、子どもたちが手作りしたTシャツは、夢のステージ後に行われた運動会においても着用されたとのことである。自分でつくったTシャツは子どもにとって心に残るものだったのであろう。

学生は夢のステージ後、4歳児を対象とした音楽活動を企画し実践した。その際、ドレミパイプ(ブームワッカー)を用いて、まず学生が演奏を披露し、その後子どもも自由に音を鳴らしたりガヴォットに合わせて合奏したりする時間を設けた。計画した当初は違う歌で子どもたちと合奏する予定であったが、本実践を踏まえ、ガヴォットを用いることにしたようだ。このように学生は、ガヴォットを様々な方法で子どもと楽しむ方法を模索してきたため、今後は曲の選択肢を広げ、子どもの豊かな表現が引き出される活動をさらに模索していくことが期待される。今年度においては、サン＝サーンス作曲「動物の謝肉祭」より数曲を抜粋し、ピアノ連弾と影絵を融合させた小さな演奏会を星稜泉野幼稚園にて実施する予定である。

5 おわりに

本実践において、3-2のお便りでも記載している通り、指導者としての不安や悩みはあった。この気持ちを払拭してくれたのは、子どもであり、保育者であった。ある保育者が『リトミックをしている時の子どもたちはありのままの姿であり、保育中と変わらない。だからリトミックの発表はこの子たちにあっていると思う』ということを伝えてくださった。今回の実践においては、これまで以上に保育者とやり取りをし、助言もいただいた。このようなやり取りや助言は、子どもたち一人ひとりがその子らしく活動に参加し、ステージに立つうえで大変重要なものであった。

また園長より、『学生さんのマリンバの音色も素敵だった。今後このような音楽活動を取り入れていきたいと思っている。』と声をかけていただいた。幼大連携だからこそ実現した本実践のように、今後、音楽のもつ魅力を学生と共に考え、子どもたちと様々な方法で味わっていきたい。

本実践において、子ども一人ひとりが感じる楽しさには濃淡があったと思われる。生き物の模倣が好きな子、ケンケンパーが好きな子、楽器を鳴らすのが好きな子など多様であり、一方で、その時・その場によっては気分が乗らないこともあっただろう。子ども一人ひとりの思いが認められ、個性が生かされつつ、子どもの“やってみよう”が引き出されるような活動の在り方については、今後引き続き模索していきたい。本実践は発表をもって一旦区切りとなるが、この経験を今後いかに生かしていくのかが求められる。今後の課題とする。



写真5 ゴセック作曲《ガヴオット》における子ども・学生・担当保育者・指導者による合奏場面
(デスクベル・マリンバ・指揮・ピアノ)

注

- (1) 青山優子 (2011) 第6章身体表現遊びを発表の場へ. 井上勝子ほか. 新訂豊かな感性を育む身体表現遊び. ぎょうせい. 156-166.
- (2) 田井敦子 (2019) 幼児の歌唱指導における実践研究. 幼年児童教育研究, 31, 23-38.
- (3) 難波純子 (2020) 楽器を用いた音楽表現の指導における保育者の悩みと困惑感. 富山短期大学紀要, 56, 81-88.

謝辞

本実践及び本報告に関しまして、星稜泉野幼稚園の西村敬子園長ならびに瀧美穂教頭、クラス担任の上田理歌教諭・西美穂教諭、職員の皆様、保護者の皆さまに心よりお礼申し上げます。また、いつも笑顔で迎えてくれる子どもたちの健やかな成長を心よりお祈りいたします。最後に、本実践における経験が、学生が今後出会うであろう子どもの笑顔につながっていくことを期待します。